

今、求められる平和教育とは

戦後70年



戦後70年を迎えたこんにち、戦争体験者が著しく減少していく中であって、戦争の記憶の風化を何とか食い止めようとするさまざまな取り組みが進められている。そのような時代の中で、若者たちに平和の大切さ、命の尊さをどのように伝えられるのだろうか。

中学生、大学生年代に対する平和教育(学習)に取り組む2人の金光教教師に、話を聞いた。

「戦争になったら行く」平和への関心低い若者

若い人たちと関わる機会の多いお二人ですが、彼らの平和に対する意識というのはどのようなものだと受け止めていますか。

小東 私は、金光八尾中学校・高等学校で中学3年生の「道徳・宗教」を担当しています。当然のことなのでしょうが、最初ほとんど生徒が平和というものをさほど意識していないように感じます。

私が授業で一番大切にしているのは、命の大切さを伝えることです。それぞれが生きて、価値観も違う中で、人間として大事にしなければならぬことは何なのか、自らが考えて自覚し、行動できるように指導しています。

平和の大切さを伝えていくための前提に、命の大切さを教えていくことが必要だと考えています。学校では、授業やホームルーム、特別活動などを通じて、命をテーマとして取り上げることが多いのですが、そうしたこともあつて、生徒のところでも命を大切にしなければならぬという感覚は身に付けているように感じます。

その一方で、よくいわれることですが、ゲームでリセットボタンを押せば生き返るようなものとして、命を捉えてしまっている面もあると思います。また、スマートフォン(ライン)などのSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)を利用する中学生も増え、ネット上でのいじめが社会問題にもなり始めています。従来の学校内での面と向かってのいじめに対して、ネット上のいじめは顔が見えま

せんで、他人を傷つけていることが自覚されにくくなっています。個人を攻撃し、人を傷つけることに何の引け目も感じず、命を大切にすることが意識しにくい状況が生まれてきていると思います。

辻井 金光教東京学生寮の寮生は大学生年代ですが、日常的に平和ということ意識しているように感じられます。十数年前の話ですが、7、8人の男子寮生と話をしていた時、戦争の話題になったことがあります。その時、もし戦争が起きたらどうするかという話になったのですが、そのほとんどが戦争に行くと答え、行かないと答えた寮生が1人しかいなかったことに衝撃を受けました。

そのうちの1人だけが、積極的に参加したいと言いつつ、他の寮生は「戦争になったら行くかな」という程度のことでしたが、戦争がどういふものかを具体的に実感できていな

いこの問題を感じました。しかし、その一件があつてからは、戦争や平和について話し合う場を意識的に設けるようになりました。こちらから話題を振ると、寮生は必ず乗ってきますし、言葉に出してまでは主張しないだけで何かしらの考えを持っているようです。おそろくですが、そんな話をしたら嫌われるんじゃないかと、場の雰囲気が悪くなるんじゃないかというように、周りの空気を読んでいるんだと思いますね。

体験者との対話や手紙「いのち」の大切さ実感

教育現場では、平和学習のカリキュラムが組み込まれていますが、戦争体験者が急に少なくなっている現状、その取り組みがとて難しくなってきた印象を受けます。辻井 子どもたちの心に響く平和学習というのは本当に難しいことだと思えますね。かつて聞いた話ですが、今から10年前の戦後60年の時、沖縄県内の高校で元ひめゆり学徒隊の女性の体験談を聞く機会があつたのですが、話を聞いた生徒から「言葉が心に響かない」「戦争してもいいじゃん」と言われ、その女性がショックを受けてしまったそうです。

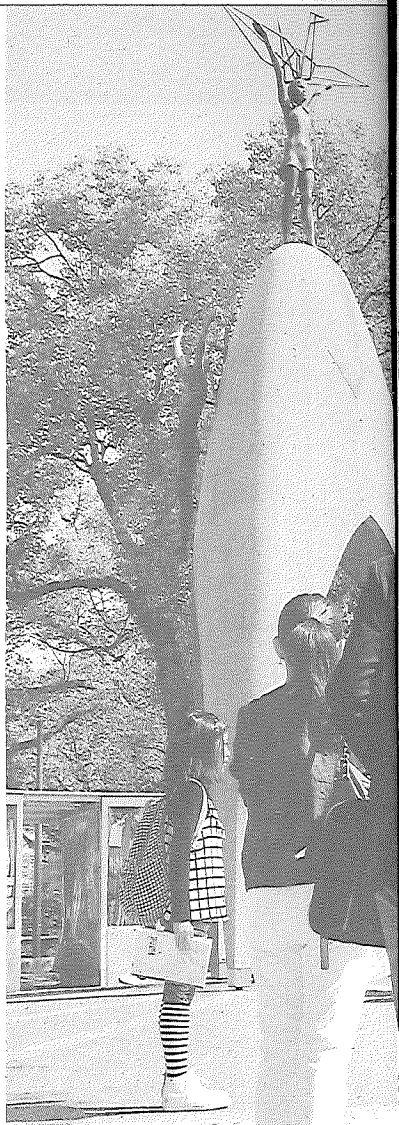
これをきっかけで、高校生や体験者がメンバーとなつて、どのように沖縄戦の体験

を伝えていけるのかを考える「虹の会」ができたそうです。その中で話したことで分かったことは、「平和は大切だ」といううわべだけの言葉を繰り返しても子どもたちの心に響かず、その伝え方に問題があるということでした。その会である時、高校生たちの質問に体験者が答えるという形式の勉強会を行ったところ、奇跡が起きました。ある体験者が、学徒動員の時に硯(すずり)を持って行ったと話したことに対して、高校生が理由を尋ねたところ、体験者が「動員先でも大好きな習字ができてと思つたから」と答えたんです。その答えを聞いて初めて、凄惨(せいさん)な地上戦がこの先に待ち受けているとは誰も



東京学生寮寮監 辻井 篤生先生 金光教東京学生寮寮監、和歌山県勝浦教会

うわべの言葉やめ本音語る



3月に広島で開催された西中国教区平和フォーラム。教区内の中高生を対象に、平和学習などを通しての交流を願って毎年開催されている。広島平和記念公園内にある「原爆の子の像」の前でガイドをする白神響記(しらかみひびき)さん(小学5年生/広島県鯉城教会)＝写真左端＝は、被爆者であった曾祖父から平和への願いを受け継ぎ、昨年からは原爆慰霊碑ガイドボランティアの講座に親子で参加している。

たわけです。

小東「道徳・宗教」の授業は週1回のペースですが、そのうち数回は平和学習の時間を設けています。本校の中学3年生は毎年、修学旅行で南九州に行きますが、その中で平和学習を行っています。これを中学生生活での集大成として、いろんな形で平和について考えてもらう学習を心掛けています。鹿児島では知寛特攻平和会館を見学します。

この記念館は、第2次世界大戦末期の沖繩戦で「特攻」攻撃をした特攻隊員の遺品や関係資料が展示されていて、生徒は特攻隊員が書き残した手記などに触れます。

学年末の最後の授業で、一年間の授業で印象に残ったことを書いてもらっています。が、平和学習の内容を挙げた生徒が大勢いるのです。「特攻で命を失った人たちが、死ぬ前に残していった家族への手紙が頭から離れない。命を懸けて戦った人たちは、この世から戦争がなくなればいいのに願っていたように思えた」「これまで、命を大切にすることや命のありがたさ、何事にも感謝すること意識したことがな

かったが、授業を聞いてとても意識するようになった。僕が生まれる前に戦争が起り、たくさんの人たちが命を落としていったのを知り、命のありがたさを実感した」ここに一例を挙げたように、戦争体験のない生徒が戦争を身近なものとして認識し、平和に対する感謝の気持ちや、命を粗末にはしていないことを学んだ、といった感想を書いてくれています。私自身、平和学習を進める際に、一度金光教沖繩遺骨収集奉仕活動に参加し、実際に遺骨が出てくる場に立ち合った経験を生徒たちに話します。祈りを込めながら土を掘ったこと、遺骨と出合った時の思い、そして林雅信先生(那覇教会長)がおっしゃっていた「声なき声を聞く」ことの大切さについて聞いてもらいます。



ないと思つた」「遺骨収集で、学び、感じた戦争の恐ろしさと、今ある平和の尊さなど、周りに伝えていくことも、私にできる取り組みだと感じた」などの感想が出ます。寮生には、いつも三つのことを話しています。それは、「実際に現場で体験すること」「犠牲になつた方々が何を言いたいのか、何を思つて亡くなられたのか、今もし生きていたらどう語り掛けてくるのか、という声なき声を聞かせ

て頂くこと」「自分なりの教訓を導き出して、あなたの周りとその次の世代に伝えていくこと」です。小東 遺骨収集に参加する前後では、私の中で平和への思いが、より具体的になつたと感じますし、平和への思いを伝えるには、自分で体感したものがないと難しいと痛感しました。その体験があるからこそ、生徒たちも臨場感を持って話を聞いてくれるのだと思います。

平和は人間生活の基本 世代人種超え取り組む

——「道徳・宗教」の授業を受けていく中で、生徒たちの平和に対する意識が変わってきた点が印象的ですが、そのような変化が生じたのは、普段から宗教教育を通して、命の大切さを伝えてきたことと関わっているのでしょうか。

小東 大いに関わっていると思います。平和への意識は、最終的に持つてくれたらいいというつもりで話をさせて頂くようにしています。私たち宗教担当の教師がよく言っているのは、「当たり前はない」ということです。「当たり前」の反対語は「ありがたい」です。有ること

中学・高校教諭 小東 徳大先生 関西金光学園金光八尾中学校・高等学校宗教担当、大阪府龍華教会

普段の授業を通して意識育む

作るのも乱すのも、皆人間の心次第であり、平和を選ぶ心を持つことで、人と人との良き関係が築けるのだということと話しています。そうしたことの積み重ねが下地になっているのだと思います。

辻井 何度も話をするからこそ自然と伝わっていくのだと思います。私の場合は、一人一人を大切にすることが人権で、人が人を大切にしようとする関係性で成り立っているのが平和だと寮生に話しています。

「天(あめ)が下に他人というものはなきものぞ」との教えのように、世界中の人々の人権と平和を守らなければならぬ。特定の国だけが平和なのではいけません。それが金光教が願っている「総氏子身上安全」「世界真の平和」なのだと思ひます。

人間は皆、自分を正当化したいという心を持つています。だからこそ、常に改まりの自覚と、他者の痛みをわが痛みとして感じられるよう成長していくことが大切で

す。一人一人がそうした体験を積み重ねて行く中で、「世界真の平和」という言葉を、理念だけではなく、具体的な取り組みにしていけることで、言葉に魂を込めていくことが大事だと思ひます。——ここからの私たちの取り組みとしてどのようなことが考えられるのでしょうか。辻井 平和というのは遠くにある理想や目的ではなく、人

間生活の前提であり、手段です。平和でない人間生活は成り立ちません。

体験の普遍化や理念の言語化とともに、それらに魂を込めていく。つくられた言葉、感情ではなく、本音の言葉、本当の感情で、さまざまな世代やさまざまな人種など、とにかくいろいろな人同士で語り合うことが大切だと思ひますね。教会現場でも、「学ぶ」「体験」「実感」「伝える」という、伝えていく場を一つでも多くつくっていくことが求められていると思ひます。

小東 生徒の反応という面では、自分の目で見て感じることの重要性を感じます。特攻隊員が戦地に向かう前に家族に残した手記を読んで涙を流す生徒もいます。

戦後70年を迎え、一國主義からの捉え方ではなく、世界に通用する価値観が必要になつてきています。世界の中の日本という見方ができるような教育が必要であり、地球人としての思想が育つ環境づくりが急務だと思ひます。それを担っていく世代に、戦争に

対する正しい知識と善悪の判断力を身に付けることは不可欠でしょうし、事実をしっかりと把握して、進むべき道筋を学ぶことができる指針を示すことが必要だと考えます。

これは、学校教育だけでなく、家庭などさまざまな場での取り組みが求められているのではないのでしょうか。